北海道指定史跡

シブノツナイ竪穴住居跡

発掘調査概要報告書（2023 年度）

史跡内容確認のための調査

湧別町教育委員会

2024. 3

例　　言

1．本書は令和５年度に湧別町教育委員会が実施した、北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡の発掘調査概要報告書である。
2．本書の編集・執筆・写真撮影・図版作成は湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館JRY・郷土館の林勇介が担当した。
3．遺跡位置図、竪穴住居跡分布図など挿図は任意縮尺とし、各図にスケールを配置した。
4．調査の記録及び出土資料は、湧別町教育委員会で保管する。
5．土層の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務所監修・日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編1967、33版2010年）による。
6．基準点測量、トータルステーションシステム・遺跡管理システムなどの測量機材の借用及び測量機材操作指導は株式会社シン技術コンサルに委託した。
7．珪藻分析及び花粉分析はアースサイエンス株式会社に委託した。
8．放射性炭素年代測定は株式会社パレオ・ラボに委託した。
9．炭素・窒素安定同位体比測定は國木田大氏（北海道大学大学院准教授）の協力を得た。
10．調査及び整理報告にあたり、下記の諸機関及び個人からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

文化庁文化財第二課、北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課、湧別町農業協同組合

熊木俊朗、國木田大、岡孝雄、近江俊秀、宗像公司、村本周三、鈴木琢也、坂本尚史、柳瀬由佳、松田功、合地信生、武田修、太田圭、森久大、今泉和也、佐藤実佑

目　　次

例言
目次

1．調査の概要…… 1
⑴　調査目的
⑵　調査要項
⑶　調査体制
⑷　調査にいたる経緯
⑸　過去の調査
⑹　調査検討委員会

2．遺跡の位置と環境…… 2
⑴　湧別町の地理と遺跡
⑵　シブノツナイ竪穴住居群の立地
⑶　シブノツナイ竪穴住居群の概要

3．調査の方法と結果…… 4
⑴　調査区の設定
⑵　基本層序
⑶　発掘調査結果（概要）

4．普及活動…… 9

5．成果と課題…… 9
⑴　竪穴住居跡の時期特定
⑵　古環境調査
⑶　範囲確認調査
⑷　今後の調査

引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

１．調査の概要

⑴　調査目的

平成30年度から、湧別町では北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡の保護及び活用を推進するため発掘調査を行っている。調査の目的は、竪穴群の範囲や遺構の年代など遺跡の内容詳細を明らかにすることである。今年度の調査目標は、①方形以外の竪穴の年代・内容、②竪穴群西側の低地の古環境、③竪穴群西側平坦地の遺構・遺物の有無、これらを確認することである。

⑵　調査要項

調 査 対 象　湧別町シブノツナイ竪穴住居群（I-21-35）
　　北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」（昭和42年3月17日指定）
所　在　地　紋別郡湧別町川西499-1･2, 502-1･2, 503, 714, 717～720, 722-1～3, 930, 1056, 1059-1番地
対 象 面 積　139,462㎡（発掘面積　22.2㎡）
発 掘 期 間　令和5年7月13日～8月19日
整 理 期 間　令和5年8月20日～令和6年2月28日

⑶　調査体制

調査主体者　湧別町教育委員会　教育長　阿部　勉
調査事務局　湧別町教育委員会社会教育課　参事　中島　一之
調　査　員　ふるさと館JRY・郷土館　主査　林　勇介
発掘作業員　菊地　俊文、小山　義幸、野上　弘幸、吉竹　司

⑷　調査にいたる経緯

北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」は平成26～29年度に北海道教育委員会（以下、道教委）が実施する重要遺跡確認調査の対象となり、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター（以下、道埋文）により測量と発掘調査が行われた。調査報告書では今後の史跡保存及び調査に求められる課題が示された。

平成28年度から道教委は「北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会」（以下、懇談会）を開催し、その実態を把握するための調査と竪穴群の保存活用の推進を行っている。平成28年度第2回懇談会は湧別町を会場として開催され、シブノツナイ竪穴住居群の保全のための意見交換や現地視察が行われた。

重要遺跡確認調査に関する道教委・道埋文・湧別町教育委員会（以下、町教委）の協議や懇談会において、町教委による計画的な調査の必要性が議論されてきた。町教委はその状況を踏まえ、主体的にシブノツナイ竪穴住居群の保護を進める必要があると判断し、平成30年度から発掘調査を実施している。

⑸　過去の調査

シブノツナイ竪穴住居群は古くとも昭和3年には郷土史研究家にその存在が知られており、

昭和4年には発掘調査が行われたと考えられる記録がある。町教委が行った発掘調査は昭和38年が最も古いもので、昭和42年には北海道の史跡に指定されている。現在までの発掘調査履歴は次のとおりである。

調査時期	調査主体	成　　果
昭和38年	湧別町教育委員会	竪穴住居跡3基(A, B, C竪穴)を発掘。擦文土器等が出土。
昭和41年	湧別町教育委員会	竪穴住居跡2基(238, 318号)を発掘。擦文土器等が出土。
平成26～29年	(公財)北海道埋蔵文化財センター	測量による竪穴分布図の作成。竪穴群の北側平坦地でトレンチ6か所を発掘し、続縄文土器等が出土。
平成30年以降	湧別町教育委員会	平成30年は竪穴群の北側平坦地でトレンチ2か所を発掘し、続縄文土器等が出土。平成31年は竪穴群の北側平坦地、431号竪穴でトレンチ各1か所を発掘。令和2～4年は竪穴住居跡計7基（方形4、多角形2、円形1）でトレンチ発掘し、擦文土器等が出土。いずれも擦文文化の竪穴住居跡であることを確認。

⑹　調査検討委員会

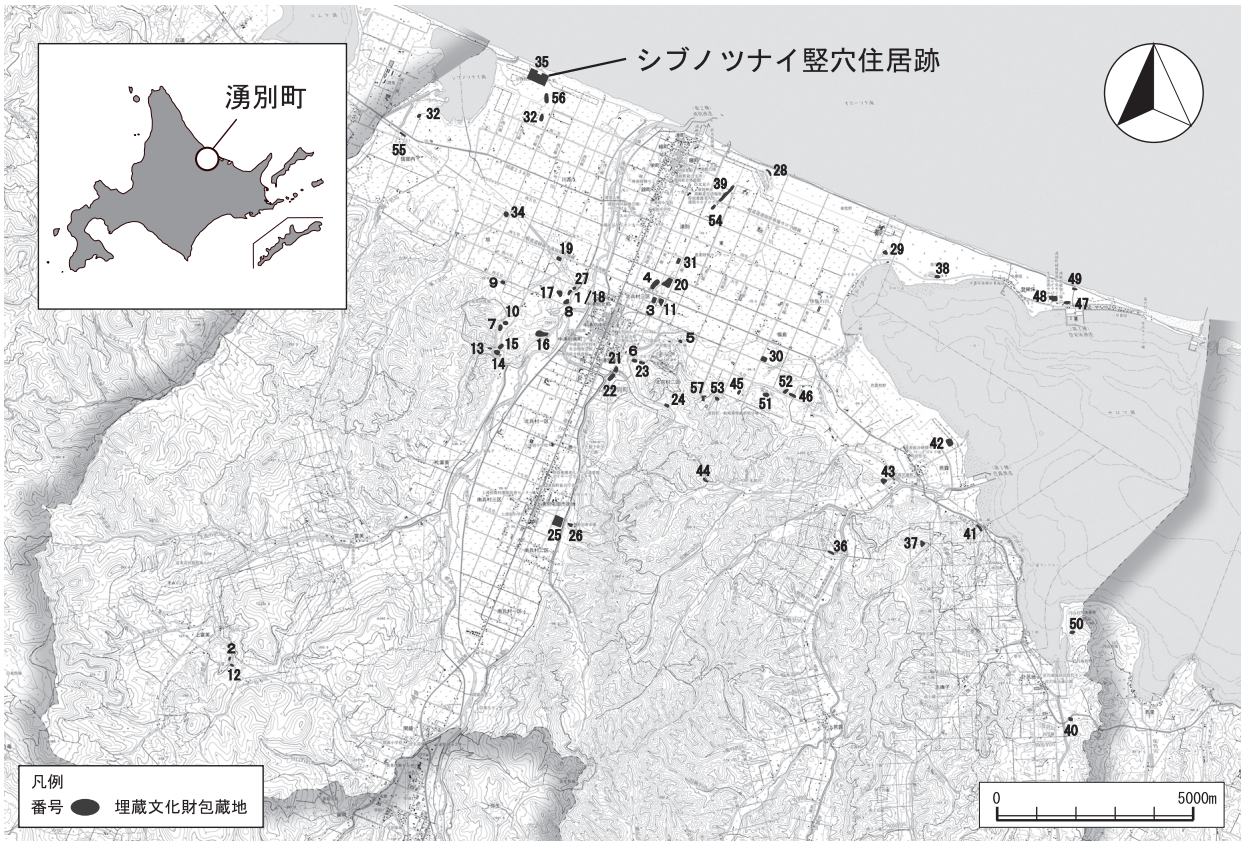
令和3年度から湧別町シブノツナイ竪穴住居群調査検討委員会を設置し、調査計画及び内容の妥当性について検討を行っている。会議は年2回開催し、委員は次の3氏である。熊木俊朗氏（東京大学大学院教授）、國木田大氏（北海道大学大学院准教授）、岡孝雄氏（株式会社北海道技術コンサルタント地質調査部長）。検討委員会に関連して、文化庁及び道教委担当者から現地指導を受けている（近江俊秀氏：文化庁主任調査官、宗像公司氏：道教委文化財調査係長）（9月28～29日）。

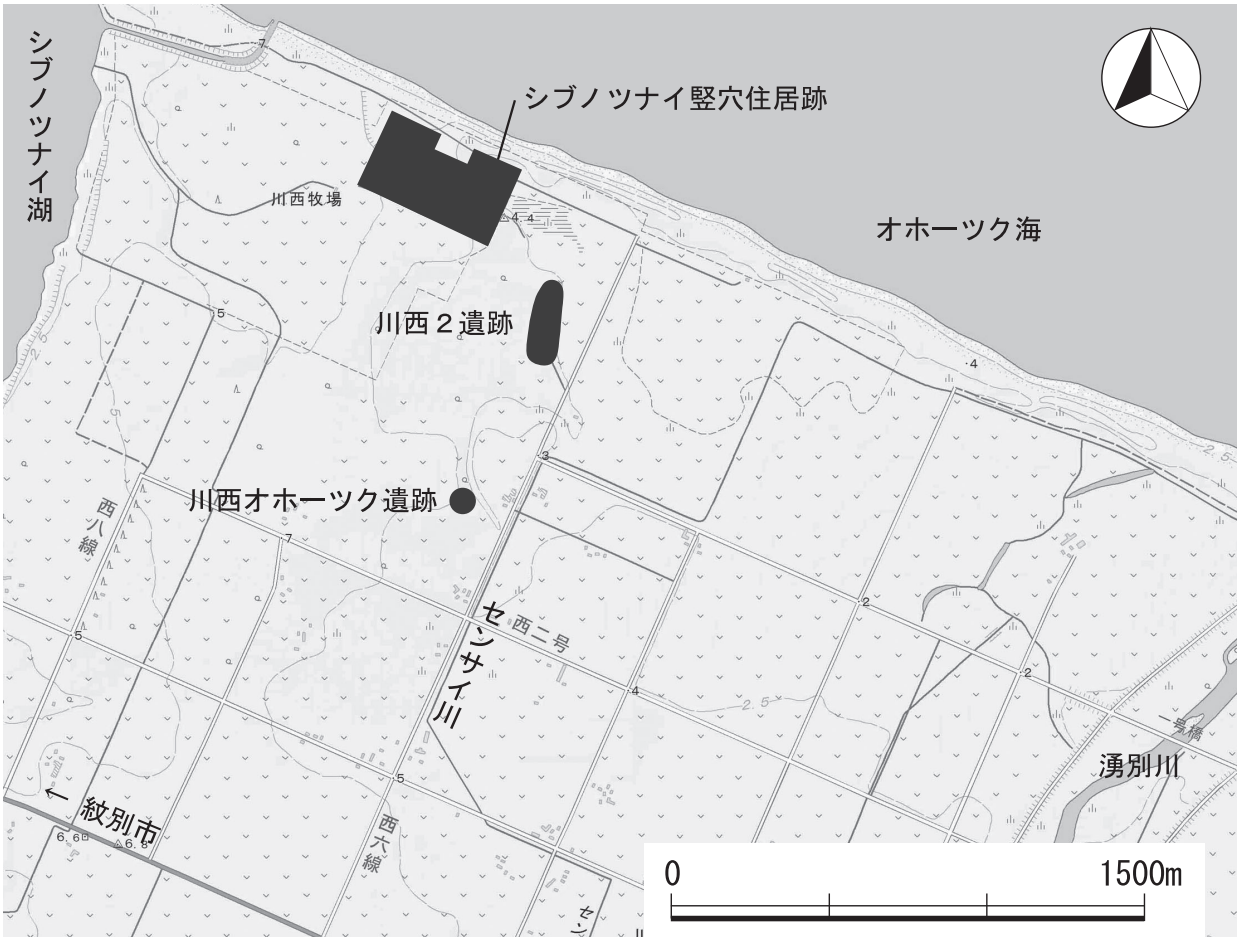
２．遺跡の位置と環境

⑴　湧別町の地理と遺跡

湧別町はオホーツク海に北面し、東はサロマ湖を囲む佐呂間町と北見市（旧常呂町）、西はシブノツナイ川を挟み紋別市、南は遠軽町と接している（図1上）。町の中心部を流れる湧別川は裏大雪山系の山並みの一つである天狗岳付近に水源を発し、北東に流れをとりながら山間を抜け遠軽に至る。そこで生田原川と合流し川幅を広げ、流れの方向を若干北に変え湧別の町を貫流しオホーツク海に注ぎこんでいる。オホーツク海に注ぎこむ河川としては常呂川に次いで大きく、市街地は湧別川が形成する扇状地を中心に発展してきた。

湧別川上流域である遠軽町白滝市街地の北方8km地点には、国内最大規模の黒曜石原産地として知られる赤石山がある。黒曜石は湧別川河口まで流れ、それを素材とした石器は湧別町内で広く確認される。町内の遺跡は旧石器時代から考古学上の「アイヌ文化期」まで幅広い年代のものが確認されており、その数は現在57か所となっている。遺跡の情報は道教委及び町教委が管理・公開する埋蔵文化財包蔵地調査カードに記載されているほか、道教委文化財・博物館課のホームページにある『北の遺跡案内』や湧別町のホームページでも確認できる。





（国土地理院電子地形図２万５千分の１「中湧別」を使用）

図１　北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」位置図

⑵　シブノツナイ竪穴住居群の立地

シブノツナイ竪穴住居群は北海道紋別郡湧別町川西499-1のほか湧別町が所有する牧草地や保安林の一部に所在し、東は湧別川の支流であるセンサイ川旧河道、西はシブノツナイ湖に挟まれた低平な舌状台地の先端部に位置している（図1下）。竪穴住居群が立地する舌状台地は標高4～5mほどで、台地の東西に広がる低地にはセンサイ川等によって形成されたと考えられる河跡沼や湿地帯が広がっている。

竪穴住居群の北側には海岸線に沿って砂丘列が形成され、周囲にはハマナス、ハマニンニク、ハマエンドウ、シロヨモギの群生が見られる。南西部から南東部にかけてはミズナラ、カシワを主体とする保安林が広がり、北西部及び北東部の低地ではヨシやスゲ類が茂り泥炭が形成されている。シブノツナイ竪穴住居群やその西のシブノツナイ湖の名称に見られる「シブノツナイ」はアイヌ語を語源としており、「ウグイのいる川」を意味している。

道史跡となっている土地は湧別町農業協同組合が公営川西牧野の一部として利用しているため、竪穴住居群の南西側には受精施設などの牧野関連施設がある。毎年5月～10月はひと月に数日間、50～150頭の乳牛が竪穴住居群に放牧されている。

⑶　シブノツナイ竪穴住居群の概要

遺跡の特徴は、多数の竪穴住居跡が窪みのまま地表面に残っていることと、それが密集した状態で確認できることである。窪みは様々な平面形状や大きさのものがあり、総数は530基を数える。平面形状毎に数を見ると、多いものから方形が326基、円形が176基、多角形が20基、柄鏡形が8基である（図2）。方形が約6割を占めていることや過去の発掘調査成果から、主に擦文文化期に形成された竪穴住居群だと考えられる。墓域や貝塚は確認されていない。

３．調査の方法と結果

⑴　調査区の設定

調査に必要となる基準点と測量基準杭は、平成27～29年度の道埋文の調査、平成30～令和4年度の町教委の調査で設定したものを継続して使用した。測量調査杭の名称は「南北ライン－東西ライン」で表している。今年の調査では新たに5本の杭（10-25、10-30、15-20、15-25、23-27）を設置した。

竪穴住居跡は322号竪穴、323号竪穴及び487号竪穴の3基を発掘調査の対象とし、0.5m幅のトレンチを設定した（図2・3）。過去の測量調査により確認されていた竪穴の平面形状はそれぞれ不整円形、柄鏡形、不整楕円形である。

古環境調査は竪穴住居群西側の低地を対象とした。土壌採取地選定のため0.3×0.3mの試掘を8地点で行い、その内2地点でバックホウを用いて1×2mの掘削を行った。バックホウによる調査地点は「古環境R5-1」のように呼称する。

範囲確認のための試掘調査は竪穴住居群西側の平坦地を対象とした。調査地点は25mメッシュの交点のうち竪穴住居群に近い12地点とし（TP1～12）、1×1mの試掘を行った。

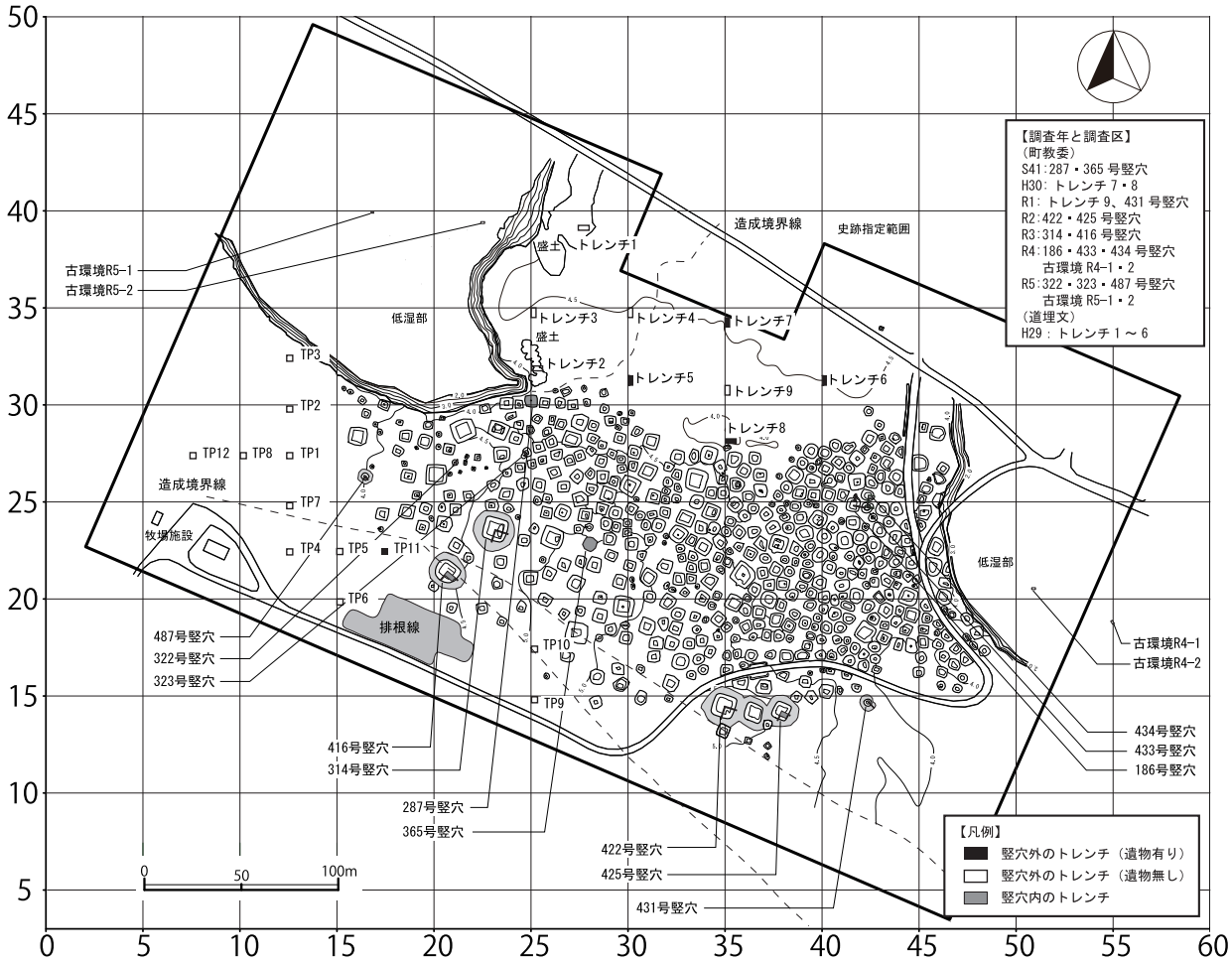


図２　シブノツナイ竪穴住居群　竪穴住居跡分布及び調査区位置図（1:4000）

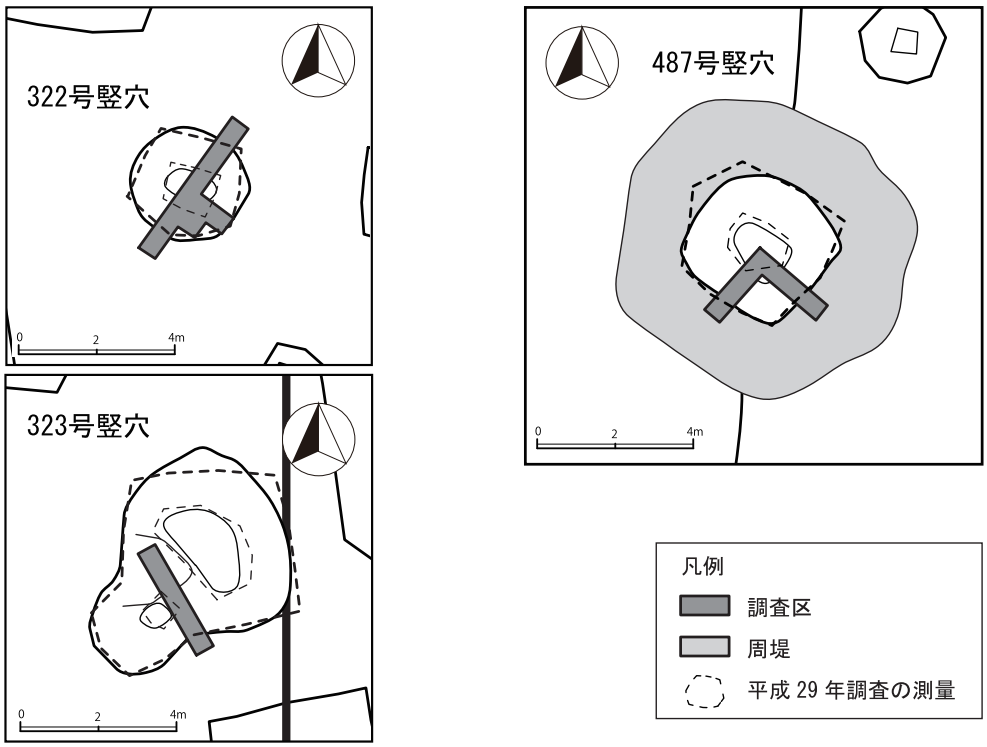
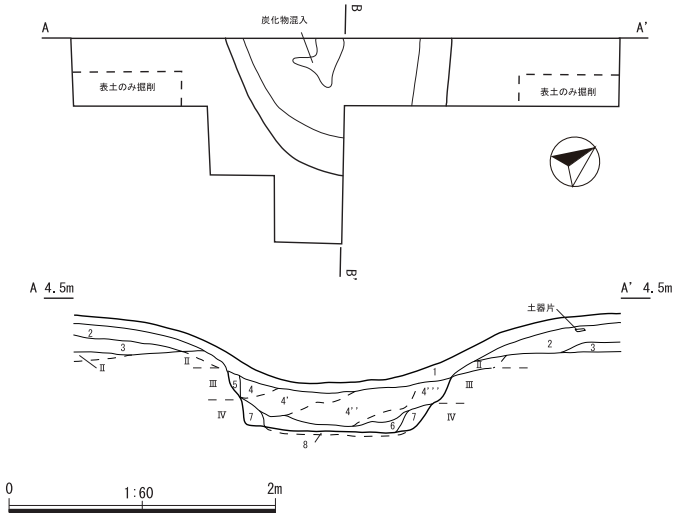
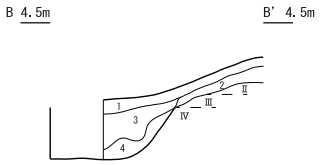


図３　322・323・487 号竪穴　平面図（1:200）

322 号竪穴





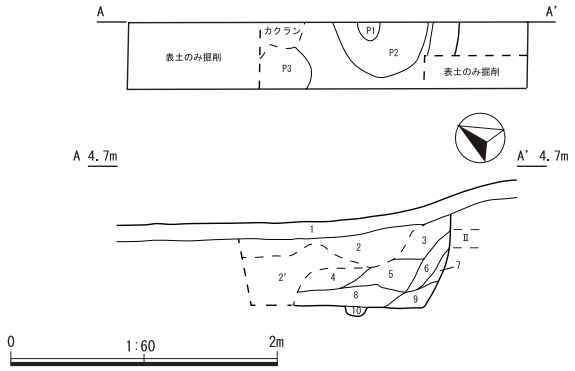
322号竪穴　西壁土層断面（A-A´）

層位	色調	その他の特徴
1	暗褐色	表土。植物根を多く含む。
2	暗褐色	堀上土、周堤か。
3	褐色	堀上土、周堤か。
4	黒褐色	カクラン。褐色土混じる。
4'	褐色	カクラン。黄色土、灰色土が斑状に混じる。
4''	黒褐色	カクラン。褐色土が斑状に混じる。
4'''	褐色	カクラン。黒色土が層状に入る。
5	暗褐色	基本層序Ⅲ層の崩れ。
6	にぶい黄褐色	黄色粒0.1～1.0mm中量。
7	黄褐色	
8	黄褐色	基本層序Ⅳ層。

322号竪穴　北壁土層断面（B-B´）

層位	色調	その他の特徴
1	暗褐色	表土。植物根を多く含む。
2	暗褐色	堀上土、周堤か。黄色粒0.1～0.5mm微量
3	にぶい黄褐色	カクラン。黄色粒0.1～1.0mm中量
4	褐色	炭化物微量含む。

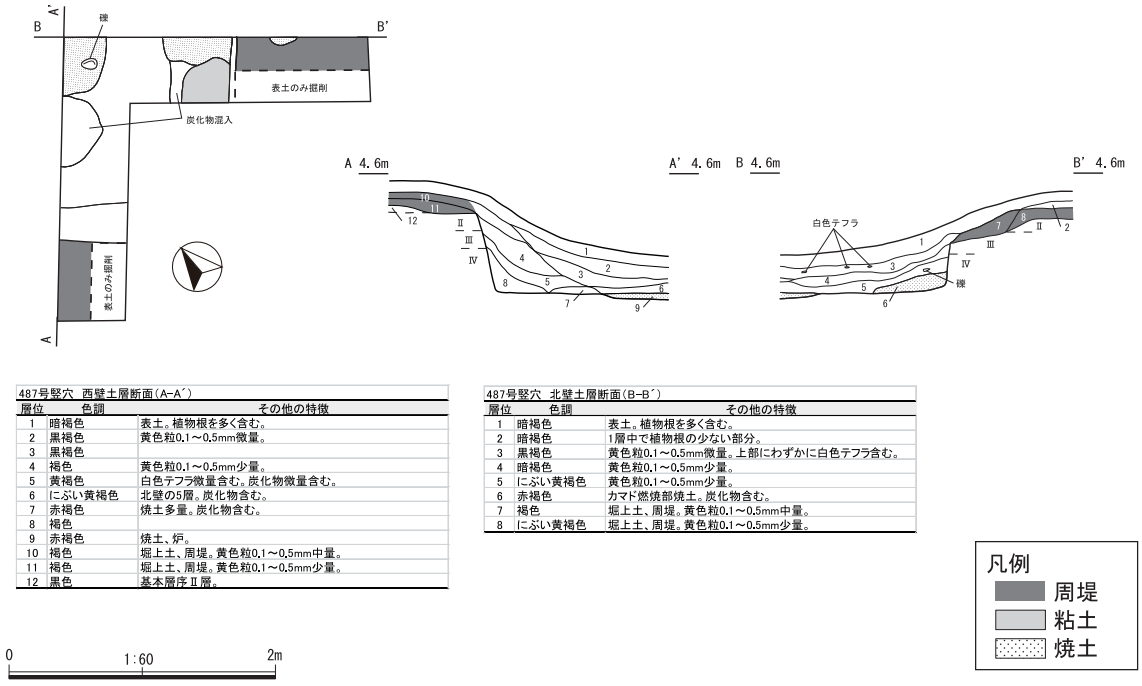
323 号竪穴



323号竪穴　北壁土層断面（A-A´）

層位	色調	その他の特徴
1	暗褐色	表土。植物根を多く含む。
2	にぶい黄褐色	黄色塊多量。
2'	黒色	黄色粒0.1～0.5mm微量、黄色塊微量。
3	黄褐色	堀上土、周堤の流れ込み。
4	黄褐色	黄色粒0.1～0.5mm微量。
5	黒褐色	黄色粒0.1～0.5mm微量。
6	黒褐色	旧表土、基本層序Ⅱ層の流れ込み。テフラ含む。
7	黄褐色	基本層序Ⅲ層の流れ込み。
8	黒褐色	白色粘土塊、赤色粒0.1～1.0中量、炭化物微量。
9	褐色	黄色粒0.1～0.5少量、焼土、炭化物、白色粘土含む。
10	黒褐色	炭化物、焼土含む。

487 号竪穴



487号竪穴　西壁土層断面（A-A´）

層位	色調	その他の特徴
1	暗褐色	表土。植物根を多く含む。
2	黒褐色	黄色粒0.1～0.5mm微量。
3	黒褐色	
4	褐色	黄色粒0.1～0.5mm少量。
5	黄褐色	白色テフラ微量含む。炭化物微量含む。
6	にぶい黄褐色	北壁の5層。炭化物含む。
7	赤褐色	焼土多量。炭化物含む。
8	褐色	
9	赤褐色	焼土、炉。
10	褐色	堀上土、周堤。黄色粒0.1～0.5mm中量。
11	褐色	堀上土、周堤。黄色粒0.1～0.5mm少量。
12	黒色	基本層序Ⅱ層。

487号竪穴　北壁土層断面（B-B´）

層位	色調	その他の特徴
1	暗褐色	表土。植物根を多く含む。
2	暗褐色	1層中で植物根の少ない部分。
3	黒褐色	黄色粒0.1～0.5mm微量。上部にわずかに白色テフラ含む。
4	暗褐色	黄色粒0.1～0.5mm少量。
5	にぶい黄褐色	黄色粒0.1～0.5mm少量。
6	赤褐色	カマド燃焼部焼土。炭化物含む。
7	褐色	堀上土、周堤。黄色粒0.1～0.5mm中量。
8	にぶい黄褐色	堀上土、周堤。黄色粒0.1～0.5mm少量。

図４　322 号・323 号・487 竪穴　調査区土層断面・平面図（1:60）

⑵　基本層序

シブノツナイ竪穴住居群で確認されている基本層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層　表土。植物の根が密に入り込んでいる。

Ⅱ層　黒色土。層厚10～20cmの腐植土層。遺物包含層。旧表土。テフラを含む。

Ⅲ層　黒褐色土。腐植土。やや粘性がある。

Ⅳ層　暗オリーブ褐色。漸移層。

Ⅴ層　黄褐色粘土。しまりが非常に強い。

Ⅵ層　にぶい黄橙色粘土。しまり、粘性が非常に強い。

⑶　発掘調査成果（概要）

①竪穴住居跡

全体　掘削は表土はスコップ、竪穴埋土は移植ごてを使用し土層の変化に注意しながら層位ごとに進めた。遺物の取り上げは、床面出土及び出土位置が重要と判断したものは位置を計測し、その他は層位ごとに一括した。埋戻しは後年の検証調査を考慮し、埋土を詰めた土のうで行った。ただし、表土分については竪穴群の景観を考慮し土を直接戻した。

調査区の測量と併せて竪穴の平面形状を再測量した。その結果、323号及び323号竪穴は平成29年の測量と大きな差はなかったが、487号竪穴は方形であることが確認できた。

【322号竪穴】（図3・4）

平面形状と規模　不整円形→楕円形、長径2.7×短径2.6m、深さ0.31m、概算面積5.5㎡

土層・竪穴の形状　竪穴はⅣ層を掘り込んでいる。床面直上に黄褐色土が堆積するが、埋土の大部分はカクラン状の土層（黒色土・黄色土等が斑状に混じる）であり、竪穴がある程度埋没したのちに人為的に掘削された可能性も考えられる。竪穴の外側では堀上土による周堤、その下には白色テフラ（摩周b）が混入する旧表土が確認できた。底面と壁は竪穴構築時の状態を残しており、平面形状は東西方向に長軸を有する楕円形であることが確認できた。

付属遺構　底面に柱穴・炉跡等の付属施設は確認できなかった。この竪穴は住居跡である可能性が低く、用途不明の竪穴と判断した。

出土遺物　カクラン状の埋土から土器片が出土した。文様が確認できるものは全て擦文土器であるが、3cm四方以下で接合できないものが大半である。代表的な土器片に胴部上半から頸部の破片がある（図版2-5-1）。胴部上半はほぼ垂直に立ち上がり、頸部はほぼ直角に張り出す。文様は複段で構成は上から4本一単位の鋸歯文、2本の横走沈線、右下がりと右上がりの沈線が組み合わされた矢羽状沈線文である。内面はミガキと黒色処理が施されている。土器片以外にはカマド構築材と考えられる焼成粘土塊が確認できた。底面で遺物は確認できなかったが、炭化木材が少量確認できたため採取した。

時期　出土遺物及びテフラの検出状況から、擦文文化後晩期と考えられる。

【323号竪穴】（図3・4）

平面形状と規模　柄鏡形、長辺6.3×5.0m、深さ0.29m、概算面積19.1㎡

土層　竪穴はⅣ層を掘り込んでいる。床面直上に黒褐色土が堆積するが、埋土の大部分はカクラン状の土層（黒色土・黄色土等が斑状に混じる）であり、竪穴は埋没後に人為的に掘削

された可能性がある。竪穴の外側では堀上土による周堤、その下には白色テフラ（摩周b）が混入する旧表土が確認できた。壁及び床面の一部は土層堆積状況から竪穴構築時の形状を残していると考えられる。

付属遺構　ピットがトレンチ南側と北側で各１基確認できたが、用途は特定できなかった。床面でわずかに焼土が見られ、埋土にも白色粘土が混じることからカマドがあった可能性がある。

出土遺物　床面では土器片が確認できなかった。カクラン状の埋土からは多くの土器片が出土しており、文様が確認できるものは全て擦文土器である。埋土下層から出土したものに甕の口縁部がある（図版2-5-2）。3段の隆起帯を有し口唇部付近が上方に立ち上がる。文様は、上から2段目と3段目に斜め方向の刻文がそれぞれ右上がり右下がりで施され矢羽状を呈している。内面は横方向のミガキと黒色処理が施されている。僅かに確認できる胴部はハケ調整の上から左下がりの沈線が連続して施されている。高坏の破片も出土しており、坏体部と脚部の接合部も確認されている。土器片以外にはカマド構築材と考えられる焼成粘土塊が確認できた。

時期　出土遺物及びテフラの検出状況から、擦文文化後晩期と考えられる。

【487号竪穴】（図3・4）

平面形状と規模　不整楕円形→方形、長辺4.0×短辺3.5m、深さ0.41m、概算面積11.0㎡

土層・竪穴の形状　竪穴はⅣ層を掘り込んでいる。床面直上に黄褐色土、その上に黒色土が堆積する。東及び南壁の外側では堀上土による周堤、その下には白色テフラ（摩周b）が混入する旧表土が確認できた。壁の検出状況から当初の平面形状は方形だと考えられる。不整楕円形と認識されたのは、窪み上端の一部に重なっていたカクラン状の窪みが影響したと考えられる。

付属遺構　東トレンチの床面でカマドと考えられる粘土及び焼土範囲が確認できた。粘土範囲ではカマドの袖部や天井部が確認できなかったので、住居廃棄時に破壊された可能性が高い。壁の外側の旧表土上面で検出できた焼土範囲は煙道の可能性がある。トレンチの中央部では炉跡と考えられる焼土範囲が確認できた。

出土遺物　南トレンチ壁際の床面で擦文文化期の土器片が出土した。甕の胴部で無文のものが多いが口縁部から底部付近まで残存する甕が1個体出土した（図版2-5-3）。口唇部の断面は丸みを帯び、器形は胴下半部から垂直に立ち上がり口縁部が僅かに外反する。外面はハケ調整が確認できるが無文で、炭化物や焼成粘土が広範囲に付着している。内面は全面にミガキと黒色処理が施されている。土器片以外では、扁平で長軸約9cm、短軸約４cmの楕円形の礫が南トレンチで3点まとまって出土している。

時期　出土遺物、付属施設及びテフラの検出状況から、擦文文化後晩期と判断できる。

②古環境調査

竪穴住居群形成当時の古環境復元のため、今年度は竪穴群西部に広がる低地で土壌堆積状況の確認と試料の採取を行った。採取地選定のため8地点で予備調査を行い、そのうち2地点で土壌を採取した（図2）。土層断面観察と土壌採取のための掘削にはバックホウを用いた。

【古環境R5-1】
標高は1.450mである。土壌堆積状況を見ると、0～約13cmは未分解泥炭層、約13～21cmは泥炭質腐植層、約21～29cmは灰褐色泥層、約29cm以下は粗粒砂～砂礫層である。各層位について試料を採取した。泥炭質腐植層の基底部でTa-aと考えられる淡褐色のガラス質火山灰層が切れ切れに挟まれることが確認できた。粗粒砂～砂礫層からは続縄文土器片が１点出土した。
【古環境R5-2】
標高は1.519mである。土壌堆積状況は古環境R5-1とほぼ同様であった。

③範囲確認調査
調査区域は竪穴住居群西側の平坦地とし、25mメッシュの交点のうち竪穴住居群に近い12か所を選定して試掘を行った（図2）。試掘坑の範囲は1×1mとし、掘削を基盤層（基本層序Ⅴ層）である黄色又は灰色粘土層まで行い自然堆積層や遺構・遺物の有無を確認した。遺構はどの試掘坑でも確認できず、遺物は1か所（TP11）で続縄文土器片2点を確認できた。自然堆積層が確認できたのは8か所（TP1～4, 7, 8, 11, 12）であった。

４．　普及活動

例年、地域の教育関係者へ発掘調査を実施していることを周知し、現地見学を希望する団体を受け入れている。今年度は次の3件を受け入れた。①7月14日、芭露学園8年生授業。②7月19日、湧別高校2年生授業。③7月28日、町新赴任教職員研修会。
11月18日には町ふるさと館JRYで遺跡調査報告会を開催し、今年度の調査速報や蓄積されてきた自然科学分析の成果などを紹介した。町内外から約40名の参加があった。

５．　成果と課題

(1)　竪穴住居跡の時期特定

平面形状が不整円形の322号竪穴と柄鏡形の323号竪穴の時期は、出土遺物やテフラの検出状況から擦文文化後期以降である可能性が高い。埋土の一部がカクラン状であるため、竪穴埋没後に盗掘または窪みの再利用等の何らかの目的で再度掘削や土の投棄が行われた可能性がある。平面形状が不整楕円形の487号竪穴の時期は、出土遺物やカマド、テフラの検出状況から擦文文化後期のものだと確認できた。
各竪穴で炭化木材が採取できた。詳細な時期特定を行うため放射性炭素年代測定を依頼中である。ここでは、昨年度実施した竪穴3基と古環境調査1地点分の年代測定の結果を表１に示す。測定した試料は全て11世紀前半から12世紀中頃の年代に収まっている。その他の自然科学分析として、出土土器の付着炭化物について炭素・窒素安定同位体比測定を実施中である。結果は、今年度実施中の年代測定結果と併せて、次年度の概要報告書または総括報告書で報告予定である。

表１　炭化木材試料の放射性炭素年代値

採取竪穴	採取層位等	$\delta^{13}C$（‰）	暦年較正用年代（yrBP±1σ）	^{14}C 年代（yrBP±1σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
186号竪穴	床面直上	−23.63±0.17	947±18	945±20	1041-1050 cal AD（ 8.19%） 1081-1089 cal AD（ 8.02%） 1090-1107 cal AD（15.62%） 1115-1153 cal AD（36.45%）	1034-1053 cal AD（15.07%） 1060-1157 cal AD（80.38%）
433号竪穴	床面直上	−26.11±0.17	985±19	985±20	1023-1046 cal AD（39.09%） 1085-1094 cal AD（ 9.26%） 1104-1122 cal AD（19.91%）	997-1001 cal AD（ 1.53%） 1021-1049 cal AD（42.63%） 1081-1134 cal AD（42.63%） 1137-1152 cal AD（ 8.67%）
434号竪穴	カマド燃焼部（焼土1）	−24.73±0.18	935±19	935±20	1046-1054 cal AD（ 7.12%） 1060-1085 cal AD（21.20%） 1094-1104 cal AD（ 8.92%） 1122-1157 cal AD（31.03%）	1039-1160 cal AD（95.45%）
古環境R4-1	深度1.6～2.5m付近 砂礫～含礫粗粒砂層	−25.77±0.30	974±21	975±20	1027-1047 cal AD（24.28%） 1083-1095 cal AD（12.58%） 1102-1125 cal AD（24.88%） 1141-1148 cal AD（ 6.52%）	1022-1052 cal AD（29.39%） 1078-1156 cal AD（66.06%）

⑵　古環境調査

古環境R5-1で採取した土壌試料について、珪藻分析及び花粉分析を行った。

珪藻分析は泥質堆積物である5試料（D2・D3・D4・D6・D7）で実施し、塩分指数はそれぞれ1.16、1.09、1.35、1.46、1.54であった。D2・D3・D4は沼沢湿地付着生種群のものが多産することから、堆積環境は湿地域と考えられる。D6・D7の堆積環境は、縄文海進後の海水の影響がやや認められる湖沼性だったと推定される。

花粉分析は泥及び泥炭質の15試料のうち有意の花粉数が得られた5試料（P2・P3・P7・P8・P9）で実施し、D帯（P7・P8・P9）とE帯（P2・P3）に区分した。両帯とも大まかに針葉樹（トドマツとエゾマツ・アカエゾマツ）と落葉広葉樹（コナラ亜属・ハンノキ属・カバノキ属）が共存して一定割合を占めている。前述したTa-aと考えられるテフラはP8とP9の間で確認されている。そのテフラを鍵層として、別途実施していたシブノツナイ湖南側湿原で行った古環境調査（花粉分析）の成果を合わせることができた。南側湿原ではA～Cの分帯を行っている。それらを統合した花粉分析の詳細データは、珪藻分析の詳細データ及び柱状図と併せて総括報告書で報告する。

⑶　範囲確認調査

調査した12地点のうち自然堆積層が確認できたのは8地点（TP1～4, 7, 8, 11, 12）である（図2）。この8地点は平坦地の主に西側にあり、土層は竪穴群北側の平坦地等で確認できる基本層序と同様であった。自然堆積層が確認できず造成を受けたと考えられる4地点（TP5, 6, 9, 10）は竪穴群の南側に集中していた。この範囲は排根線の周囲にあるため草地造成の影響を受けたと考えられる。国土地理院の航空写真（昭和59年5月23日撮影）では、道史跡南側の牧草地で草地造成が行われた様子が確認できるため、現状と過去の記録で整合性がある調査結果だと判断できる。

⑷　今後の調査

令和6年度も発掘調査を行い、遺跡の内容確認作業を継続する予定である。具体的な調査内容は令和5年度第2回調査検討委員会の結果を踏まえて決定する。発掘調査は令和6年度で一区切りとし、令和7年度に総括報告書を発行する予定である。

図版1

1　調査区遠景（323号竪穴の北東から）

2　322号竪穴（南から）

3　322号竪穴（南西から）

4　322号竪穴（南東から）

5　323号竪（南西から）

6　323号竪穴　床面

7　323号竪穴（北西から）

8　487号竪穴 東トレンチ（北西から）

図版2

1　487号竪穴　東トレンチ（南西から）

2　487号竪穴 東・北トレンチ（北から）

3　範囲確認調査（TP11）

4　古環境調査

5　出土遺物（1：322号竪穴、2：323号竪穴、3：487号竪穴）

引用・参考文献

報告書等

網走市立郷土博物館　1990『網走市立郷土博物館収蔵考古資料目録第４集「オホーツク沿岸の遺跡」』

北海道立埋蔵文化財センター　2015『重要遺跡確認調査報告書第10集』
2016『重要遺跡確認調査報告書第11集』
2017『重要遺跡確認調査報告書第12集』
2018『重要遺跡確認調査報告書第13集』
2019『重要遺跡確認調査報告書第14集』
2020『重要遺跡確認調査報告書第15集』
2021『重要遺跡確認調査報告書第16集』

湧別町教育委員会　2019『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡　発掘調査報告1』
2020『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡　発掘調査概要報告書(2019年度)』
2021『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡　発掘調査概要報告書(2020年度)』
2022『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡　発掘調査概要報告書(2021年度)』
2023『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡　発掘調査概要報告書(2022年度)』

青柳文吉編　1995『北方民族博物館調査報告　湧別町川西遺跡』北海道立北方民族博物館

大場利夫　1965「湧別町古代史」『湧別町史』　湧別町
1966『湧別町シブノツナイ遺跡調査概要』　湧別町教育委員会

熊木俊朗　2016『擦文文化期における環オホーツク海地域の交流と社会変動 - 大島2遺跡の研究(1) - 』東京大学大学院人文社会系研究科付属北海文化研究常呂実習施設
2021『アイヌ文化形成史上の画期における文化接触：擦文文化とオホーツク文化 - 大島2遺跡の研究(2) - 』東京大学大学院人文社会系研究科付属北海文化研究常呂実習施設

米村喜男衛　1961『川西遺蹟調査報告』網走郷土博物館シリーズ　網走市立郷土博物館

米村喜男衛　1981「北海道紋別郡湧別町川西遺跡」『北方郷土・民族誌』3　北海道出版企画センター

米村哲英　1963『北海道紋別郡湧別町字川西シブノツナイ遺跡調査概報』湧別町

論文等

大沼忠春編　2004『考古資料大観 第11巻　続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館

熊木俊朗　2018『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』北海道出版企画センター

小疇尚・野上道男・小野有吾・平川一臣編　2003『日本の地形2　北海道』東京大学出版会

後藤壽一　1932「北見の遺跡をたづねて」『蝦夷往來』第7号　尚古堂

榊田朋宏　2016『擦文土器の研究』北海道出版企画センター

塚本浩司　2002「擦文土器の編年と地域差について」『東京大学考古学研究室研究紀要』17　東京大学考古学研究室

戸苅賢二・土屋篁　2000『北海道の石』北海道大学出版会

長尾捨一　1962『5万分の1地質図幅説明書「中湧別」』北海道開発庁

中田裕香　2016「大場利夫と竪穴群」『北海道考古学』第52輯　北海道考古学会

藤本強　1988『もう二つの日本文化』東京大学出版会

本間源治　1928「湧別沿岸紀行」『郷土研究』創刊号　北見郷土研究会

町田洋・新井房夫編　2003『新編　火山灰アトラス - 日本列島とその周辺』東京大学出版会

横山英介　1990『擦文文化』ニュー・サイエンス社

報　告　書　抄　録

ふりがな	ほっかいどうしていしせき　しぶのつないたてあなじゅうきょあと　はっくつちょうさがいようほうこくしょ（2023ねんど）
書名	北海道指定史跡　シブノツナイ竪穴住居跡　発掘調査概要報告書（2023年度）
副書名	史跡内容確認のための調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	林　勇介
編集機関	湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館JRY・郷土館
所在地	〒099-6325　北海道紋別郡湧別町北兵村一区588番地　　TEL01586-2-3000
発行年月日	西暦2024年3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		日本測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
シブノツナイ竪穴住居群（道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡）	北海道紋別郡湧別町川西499-1・2,502-1・2, 503, 714, 717～720, 722-1～3, 930, 1056, 1059-1	15598	I-21-35	44°14′40.14″	143°34′32.56″	2023.7.13～8.19	22.2㎡	史跡保護のための詳細分布調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
湧別町シブノツナイ竪穴住居群（北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡）	集落跡	続縄文文化期 擦文文化期	窪みで残る竪穴住居跡が530基。 竪穴は4～7m規模の方形を呈するものが主体であるが、10m前後の大型のものが15基見られる。	擦文土器	竪穴住居跡3基でトレンチ調査。

北海道指定史跡
シブノツナイ竪穴住居跡
発掘調査概要報告書（2023年度）
史跡内容確認のための調査

発行年月日　2024年3月20日
編集・発行　湧別町教育委員会
〒099-6325　北海道紋別郡湧別町北兵村一区588
湧別町ふるさと館JRY・郷土館
電話(01586)2-3000
印刷　株式会社岡田印刷林印刷所
北海道紋別郡湧別町中湧別北町153番地